

三富新田関連年表

延暦 24 年 (805 年)	・坂上田村麻呂が蝦夷征討の際、現在の上富地域に木ノ宮地蔵堂を創建（伝承）。
9 世紀末～ 10 世紀前半頃	・『伊勢物語』で三芳町の周辺の情景を「みよし野」と詠んだ歌が記される。
元禄 6 年 (1693 年)	・近隣の村々が採草地として利用していた、後の三富新田にあたる「立野」に対して周辺 9 か村が川越藩を相手取って幕府に訴えを起こす。
元禄 7 年 7 月 (1694 年)	→幕府の判断で立野が川越藩の領地であることが認められる。これにより立野の開発が始まる。
元禄 9 年 5 月 (1696 年)	・検地が行われ、三富新田ができる。
同年 8 月	・多福寺、多聞院が建立される。
寛延 4 年 (1751 年)	・南永井の吉田弥右衛門が、上総国（現在の千葉県）からさつまいもを導入。その後、近隣の村に伝わる。
昭和 37 年 (1962 年)	・三富新田が「三富開拓地割遺跡」として埼玉県指定文化財の旧跡に指定。
平成 26 年 (2014 年)	・「武蔵野の落ち葉堆肥農法」を世界農業遺産に初申請。
平成 27 年 (2015 年)	・「三芳町川越いも振興会」が第 54 回農林水産祭のむらづくり部門で天皇杯を受賞。
	・「武蔵野の落ち葉堆肥農法」を再申請し、平成 29 年に日本農業遺産に認定。
令和 2 年 (2020 年)	・「武蔵野の落ち葉堆肥農法」を世界農業遺産に申請（4 度目）。
令和 5 年 (2023 年)	→「武蔵野の落ち葉堆肥農法」が世界農業遺産に認定 
令和 8 年 (2026 年)	・三富新田開拓から 330 年



の木を植えて土が風で飛ばされるのを防ぎました。ヤマは周囲のヤマと連なることで地域一帯の防風帯となり、強い季節風から農地を守る役割を果たしています。そして、土の苦勞を乗り越えるために行われてきたのが「落ち葉堆肥農法」。ヤマから掃き集めた落ち葉を堆肥にして畑地にすき込み、長い時間をかけて土を豊かにする循環農法です。落ち葉堆肥には土の保水力を高める効果もあり、水の乏しい三富新田で農業を続けるための大きな支えとなっていました。

世界が認めた農法
こつした、地割による地域資源を最大限活用した伝統農法は、令和 5 年 7 月に「武蔵野の落ち葉堆肥農法」として、首都近郊の農法では唯一、世界農業遺産に認定されました。
世界的に認められた三富新田の地割は、南米チリ、サンペドロ村では砂漠化防止の農村計画の参考にされ、成果を上げています。先人によって築き上げられた叡智の結晶は現代社会においてもその価値を発揮し続けているのです。

三富新田を参考にした農村計画



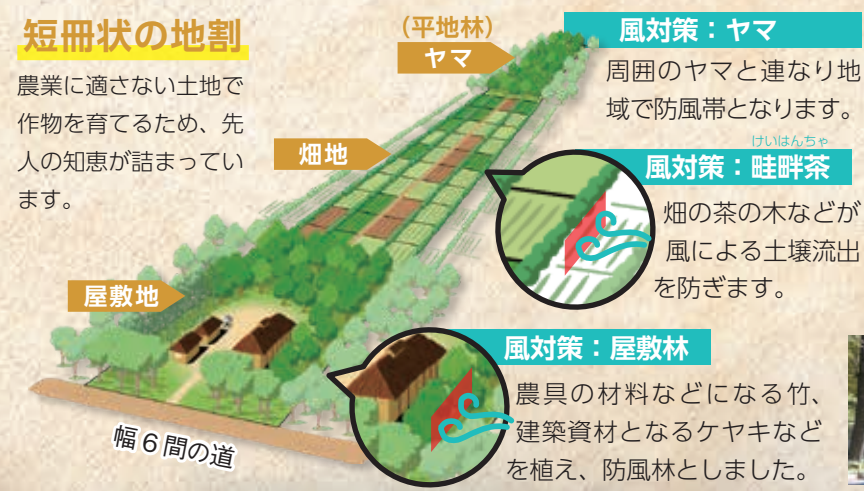
受け継がれる、三富の知恵

営の生い茂る原野を一から切り開いた三富新田には、風や土などの開拓の苦勞を乗り越えるため、先人たちの知恵とたゆまぬ努力が詰まっています。

計画的な開拓
三富開拓は幅 6 間（約 11 m）の道を縦横に開くことから始められ、上富ではこの道の両側を間口 40 間（約 72 m）、奥行 37.5 間（約 67.5 m）の短冊状に区画し、一軒あたり 5 町歩（約 5 ヘクタール）ずつ配分。下の地割図からもわかるように、道路に面した表側を屋敷地、その次に畑地、一番奥にヤマ（平地林）をつくりあげました。この地割は現在まで受け継がれ、この地域独特の貴重なランドスケープになっています。

知恵が詰まった地割
屋敷地にはケヤキやカシ、竹などを植えて防風林に。また、畑地にはウツギや茶

武蔵野の落ち葉堆肥農法



三富開拓は、農業を行うには非常に厳しい自然条件の土地で作物を育てるため、一軒の敷地を短冊状にして屋敷地・畑地・ヤマ（平地林）を配置。ヤマには堆肥に適したクヌギ、コナラ、エゴなどの木を一から植えて、落ち葉を堆肥化して土壌改良を行いました。



現在「いも街道」と呼ばれる道（県道 334 号など）の両脇のケヤキの木は並木ではなく、屋敷林の名残です。